

全カリ、GLAP、リベラルアーツ

文学部史学科教授（前全カリ部長） 青木 康

全カリとGLAP

立教大学は1994年12月に全学共通カリキュラム運営センターを設置して、1997年4月にはそれ以前の教養科目群を一新した全学共通カリキュラム（以下、全カリという）¹⁾を導入した。これにかかわって特に強調すべき事実として、立教大学では伝統的に、「教養人」（ここでは、「特定の学問ディシプリンや職業ニーズに直結した専門分野に限定されない、さまざまな領域の学問を幅広く修得して、視野の広い考え方を身につけた人間」と定義しておきたい）を育てることをめざすリベラルアーツ教育が大切にされてきていたが、全カリ導入を前にして、大学全体の教育目標が「教養ある専門人の育成」から「専門性に立つ教養人の育成」へと改められたということが挙げられる。これを最初に提唱したのは初代の全カリ運営センター部長を務めた寺崎昌男氏であったが、それにより、立教大学は、学部の違いを越えてリベラルアーツ教育をいっそう重視する方針を明らかにしたとすることができよう。このように、全学部の学生がそれぞれの専門教育科目と並行して広く全学共通に履修する全カリは、その導入の時点から、大学のリベラルアーツ教育において特に重要な役割をになうべきものと位置付けられることになったのである。

この全カリの導入からちょうど20年を経た2017年4月、立教大学は、グローバル・リベラルアーツ・プログラム（略称：GLAP）を開設することとなった。このプログラムは、2014年度に策定された立教大学の国際化のための戦略「Rikkyo Global 24」の核となる教育改革の取組みのひとつで、このコースに入学した学生は、1年間の海外留学の期間を含む4年間の課程を通じて、英語で行われる授業科目のみの履修によって学士の学位を取得できるというものである。日本中で大学教育のグローバル化がかまびすしく叫ばれるなか、GLAPも英語の運用能力や海外留学といった要素が強調されるプログラムになっている。しかし、前段において述べたように、立教大学の推進する教育の基本は、教養人の育成をめざすリベラルアーツ教育であり、この新しい国際化のための取組みもその例外ではない。このプログラムの名称が、単なるグローバル・プログラムではなく、リベラルアーツ教育をその特徴として強く打ち出した「グローバル・リベラルアーツ・プログラム」となっているのも、それを示している。したがって、立教大学のリベラルアーツ教育を発展させていく立場から言えば、GLAPは、先行する全カリの教育改善の試み²⁾に学びつつ、大学教育のグローバル環境という現代的な要素をあらためて意識した工夫をさらに重ねることを通じて、リベラルアーツ教育の新しい可能性を

探っていく取組みと定義することも可能であるように思われる。

学生が自ら考えることを促すリベラルアーツ教育

リベラルアーツ教育とは、「さまざまな領域の学問を幅広く修得して、視野の広い考え方を身につけた」教養人を育てようとするものである。そのようなリベラルアーツ教育が行われるためには、カリキュラム上にさまざまな分野の科目が展開され、学生が卒業までに受ける授業のなかで幅広い知識が得られるようになってきていることが、もっとも基礎的な前提条件となる。全カリは総合大学である立教大学の全学部が支えるものであり、その組織的な特長を十分にいかして、全カリには実に広範な科目が展開されており、この前提条件は十分に満たされている。

ただし、ものを幅広く知っているということは、教養人となるためのリベラルアーツ教育のあくまでも出発点にすぎない。将来自分の専門外の未知の問題に直面したときにも視野の広い考え方ができるようになっているのが教養人というものであり、そのためには、さまざまな学問分野にわたって、単に知識をもっているというだけでは不足で、それぞれの学問の基本的な考え方とか方法とかをある程度まで身に付けていて、必要に応じてそれを使ってすみやかに問題解決に向かうことができるということではなければならない。したがって、学生時代には、自分が専門にしている以外の（できるだけ幅広い）分野の学問についても、その基本を学び、その学問の立場から問題を考えてみる訓練を行っていることが望ましい。ただ、日本の大学においては、専門外の学生にいろいろな学問を学ばせる教養科目（大学大綱化以前の一般教育科目、現在では総合系科目などと呼ばれることが多い）は、1人の教員が何らかの問題をめぐって一方的に講義を行い、多数の学生がそれを聴いているという昔ながらの授業形態をとっていることが、今日にいたるまで圧倒的に多い。立教大学の全カリの総合教育科目でも、1学年数千人の学生に卒業要件単位として20単位前後を修得させなければならないという事情から、多人数科目が相当高い割合をしめることになる。もちろん、そのような形態の科目であっても、履修者がしっかりと問題を考えて、その講義の背景にある学問の考え方や方法の基本をきちんと身に付けるといったこともありうるし、私たちはそれに期待してきたのもあるが、リベラルアーツ教育として、学生自らが考える授業を積極的に進めようとする立場からすれば、それでは十分であるとは言えない。

この点について、少なくとも全カリの総合教育科目においては、学生が自ら問題を考えることにつながるような工夫がいろいろと試みられてきたことを忘れるべきではない。たとえば、つねに複数の教員が教室にいて、適宜教員の間で議論を戦わせながら授業を進めていく「総合B」³⁾という科目（群）が、年間の想定履修者総数で言えば数千人規模で開講されてきた。この科目は複数の学問ディシプリンの教育的協働を試みるものでもあるが、（多くの場合、学問的背景を異にする）複数の教員が授業内で講義を行い、互いに議論を戦わせることで、履修している学生には、それぞれの学問の考え方

方法を明確に意識させたうえで、自らはどのように考えるのか自覚的な選択を迫るのである。

また、全カリの多くの科目では、ゲストスピーカーが利用可能になっている。同制度の導入当初は、利用が一部の科目群に限られていたが、その後、より広く使えるようになった。ゲストスピーカー制度は、科目担当教員が学外者をゲストとして限られた回数授業の場に招き、授業内容にかかわる話をしてもらおうというものである。その授業における役割は、どのようなゲストに来てもらうかによって、当然変わってくるのであるが、総じて「総合B」について述べたことと同様、担当教員および、彼と立場や学問的バックグラウンドを異にするゲストとが教壇から話し、質疑応答を行うのを聴いていた学生に対しては、教壇からの語りの背後に存在する話者それぞれの立場や学問的バックグラウンドをきちんと読み取り、自分はどのような立場から考えるのかを明確にするよう促されるという効果が期待される。

以上2つのパラグラフで触れた、複数教員で作り上げる「総合B」や、ゲストスピーカーを利用した講義科目は、それを履修する学生に、一方的に受け身ではない受講態度を促す点でリベラルアーツ教育において重要と思われる。その延長線上に考えられるのは、学生が自ら考えたことを発言、討論、報告したりする、いわゆる学生参加型の授業である。講義科目とされている科目であっても、履修者数が少なければ、授業に学生参加の要素をいれていくことは可能であるが、当初から履修者数を（最大でも30人程度に）限定して学生参加型の授業を構想した演習（ゼミ）科目が用意されているカリキュラムであれば、より大きな教育効果を期待できる。先にも述べたように、一般に教養科目は多人数が受講する講義科目として開講されることが多いが、全カリ総合教育科目では、一部の分野についてはあるが、一貫して演習科目が用意されてきた。このことは、立教大学のリベラルアーツ教育の充実という点からも特筆すべき取り組みであったと考えられる。また、カリキュラム改定が重ねられるなかで、「立教ゼミナール」「領域別B」のような演習系の科目群が工夫され、その科目開発・運営にあたって全カリ運営センターが特に力をそそいだこともここで強調しておきたい。特別外国人学生と全カリの学生がともに学ぶ「英語による日本研究科目」（通称F科目）も、立教大学の国際化政策の一環で導入が決まったものであるが、全カリ総合教育科目のなかの演習系科目として分類することができる。

「全カリの進化形」としてのGLAP

2017年度から始まるGLAPは、リベラルアーツをそのプログラム名に掲げる学位プログラムであるが、皮肉にも、GLAPに所属する学生は、これまで立教大学のリベラルアーツ教育で重要な役割をになってきた全カリ総合教育科目の後継たる全学共通科目総合系科目をいっさい履修せずに卒業することができる⁴⁾。GLAPの学生は、入学時に専門の学部・学科が決まっている立教大学の通常の学部生とは異なり、集中的に

学修する領域の選択⁵⁾を、1年間の海外留学から帰国した後、3年次の秋に行うことになっているので、入学から留学出発までの最初の3学期間は、GLAPとして独自に設けているリベラルアーツ教育のための科目を中心に学んでいくことになる。なかでも、ELA(English Liberal Arts)と呼ばれる科目群は、GLAP生にとって全学共通科目総合系科目の「多彩な学び」にあたる部分で、“World History”、“Political Sociology”、“Nature of the Earth”など7科目(ただし、2017年度には、“World History”のみ春・秋の両学期に開講されるため、8つのクラス)が開講される。GLAP生は卒業するまでにELA科目のうち少なくとも5科目を履修し、そこで20単位を修得しなければならないことになっている。

GLAPは、大学教育のグローバル環境を強く意識して、すべての授業を英語で行うことをカリキュラム設計の大原則としているが、さらに具体的なカリキュラムの策定過程では、欧米、特にアメリカ合衆国のリベラルアーツ系の諸大学において展開されている優れた教育の事例をいろいろと参照している。その結果、ELA科目は、GLAPのその他のいくつかの科目とともに、週1回授業が行われる通常科目よりインテンシブな学修が可能となる週2回4単位科目として開講することとした。GLAPは1学年の定員が20名という小規模で発足することから、これら週2回4単位科目はいずれも講義科目という位置付けではあるが、その履修者数⁶⁾に応じて、できるだけゼミ的な要素をもとりにれた授業を進めることになっている。また、ELA科目では、適宜ゲストスピーカーやTAを用いることが認められており、授業の活性化、別の言い方をすれば、履修学生が主体的に考え参加する授業の実質化に資することが期待されている。さらに、GLAPでは、最大履修者数5の超少人数の1年次用演習科目“Tutorial”をはじめ、複数の演習科目が設けられており、学生が授業で問題を自らしっかりと考えて、さまざまな領域の学問を幅広く修得していくというリベラルアーツ教育の実現が、制度面でも手厚く保障されているのである。

このように見てくると、全カリ・全学共通科目とGLAPはまったく異なるものではなく、むしろリベラルアーツ教育という基本的な性格を共有しているカリキュラム／プログラムであることが理解できる⁷⁾。GLAPは、全カリの教育改善の試みも受け継ぎつつ、小規模な先進的試行プログラムである利点をいかして、リベラルアーツ教育推進にとって重要な外的条件となる少人数教育(や、週2回授業科目の展開)を実現しえたのであり、その限りにおいて「全カリの進化形」と考えることも十分に可能なのである。

注

- 1) 2016年度以降実施されている全学共通科目は全カリの後継科目群と位置付けられ、本稿では特に必要な場合以外、両者を区別しない。また、外国語教育の部分(全カリの言語教育科目、全学共通科目の言語系科目)については、原則として本稿では取り扱わないこととする。
- 2) 全カリ運営センターが、教養科目群としての全カ리를運営する機関であると同時に、大学全体の教育改革運動の核となる組織としても自らを位置付けてきたことは、強調されるべきである。なお、後者の役割に特化した独立した全学組織として大学教育開発・支援センターが誕生したのは、2004年10月のことであった。
- 3) 「総合B」は、2012年度以降は「主題別B」、2016年度以降(全学共通科目)では「コラボレーション科目」と名称が変わっているが、その本質に違いはないと思われる。
- 4) GLAP生も全学共通科目の総合系科目を履修し、そこで修得した単位を自由科目として卒業要件単位に算入することは可能である。なお、GLAPの学生も、卒業するには全学共通科目の言語系科目で10単位を必ず修得するという全学統一の卒業要件単位の規定には従う。
- 5) GLAP生は、“Global Studies”の3領域、“Humanities”、“Citizenship”、“Business”のうちから1つを選択する。
- 6) GLAPが展開する週2回4単位科目のうち、GLAPの必修科目についてはGLAP生以外の履修を認めないので、履修者はつねに20人程度である。他方、ELA科目は、全学共通科目としても併置開講するとともに特別外国人学生にも開く(いずれも人数制限を課す)ので、その履修者は最大で40人程度と考えられる。
- 7) この基本的性格の共有は、GLAPと全学共通科目の中間に、2017年度から全カリ運営センターが中心にかかわる形で動きだすグローバル教養副専攻制度を置いてみることで、いっそう理解しやすくなるかもしれない。